りんご大規模省力的な生産・流通体系を確立のためのコンソーシアム

大規模高密植生産供給体制モデル

- 対象果樹／**りんご**（ふじ、ぐんま名月等）
- 対象市町村／**北海道共和町他**
- 中核機関／**Wismettac フーズ株式会社**
- 参加企業・団体等／トレイリックス株式会社
  ノルデックス株式会社

輸出向けりんごの大規模で省力的な栽培に取り組み、生産・選果・物流・販売・マーケティングまでを一体化させたバリューチェーン一体型農業経営モデル事業となり、全国への普及・発展を目指します。

集荷・選果・貯蔵・輸出・物流まで輸出に向けたバリューチェーンの構築

北海道の輸出港近隣の圃場で、生産を拡大していくことを見据えて海外の市場に合わせた生産の実証を行う。生産のランニングコストを下げ効率を上げ、輸出にかかるコストを抑え、輸出用りんごのバリューチェーン構築を目指す。

りんごの高密植栽培

りんごの高密植栽培による輸出用りんごの生産実証を4haから行い、2035年には200haに広げる計画。園地の整備等、設備投資は必要だが機械化を前提に設計されているため、農薬散布や収穫等、作業を定型化しやすく、果実に光が当たりやすく、摘花・摘果剤の散布も機械で行うことができるため、色味やサイズの揃ったりんごを生産しやすい。

海外コンサル活用による再現性の高い海外の栽培体系の導入

ニュージーランドから年に複数回、剪定・誘引の仕方等、栽培に関する栽培指導を受ける。日本からニュージーランドにも３回ほど訪問して生産トレーニングしている。通常、日本では行政の普及指導員やJA営農指導員と連携して地域特性に見合った防除暦と呼ばれる栽培マニュアルを作成するが、北海道では該当の栽培方法の確立が不十分であるため、まずは防除暦の整備を目指す。将来的には農業ICTによるセンシングやIPM（総合的な病害虫・雑草管理法）と呼ばれる方法を用いて適切な圃場管理を行い、ターゲットとなる輸出国に合わせた栽培方法の確立を目指す。

該当作物の一般的な栽培状況や課題

国内ではマルバカイドウ台木を使った栽培方法が主流で、わい化栽培は立体的（3D）に木を仕立てるため、適切な剪定や葉数管理に熟練の技術を要す。天候によって色味や食味の差が出やすく、病害虫防除や摘花・摘果の散布等、生産において機械化が難しく、省力化に課題がある。

コンソーシアムが目指す将来像

高密植栽培で木を平面的（2D）で仕立てることで、作業の定型化や機械導入を容易にし、一定の規格・品質でのりんご栽培の生産性向上が目指せる。また、1圃場当たりの面積を5ha以上確保することで、機械導入コストの合理化につなげ、将来的に1000haまで圃場を拡大させる。

現状（Before）

- 反収：2.7t/10a　●労働時間：200時間/年/10a
- 労働生産性：5.3百万円/人（所得）

6年後の目標（After）

- 反収：6.5t/10a以上　●労働時間：180 時間/年/10a 以下
- 労働生産性：12百万円以上/人（所得）